

誇りと

チャレンジング精神を！



副学長・教務担当部長 井上 徹

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。これからの4年間の大学生活は、皆さんにとって未知の新たな世界です。いろいろなことに挑戦し、より良い人生を切り拓けるようにしてください。

私が大学に入った頃を思い起こしてみると、いわゆる団塊の世代の直後の時代でしたが、なお若年層の人口が多く、小学校から高校まで競争にさらされてきました。競争とはいっても今と異なり、日本全体がなお貧しかったですから、進学率は低く、家庭の事情で中学校、高校卒業後に就職する者も多かったのです。社会的上昇の経路が大学進学へと一本化されているわけではありませんでした。異なる家庭環境に育って、いろいろな価値観をもつものがひしめき合って、互いに競い合って夢を求めていたという印象があります。

そうしたなか、裕福でない家庭に育ち、良好な勉学の環境をもたなかった私が大学まで進学できたのは幸運でしたが、入学当初は、もうこれで苦手な科目の勉強をしなくても済む、自由に時間を使える、などなど、束縛から解放されるといった思いが

# アン ロゾ Un roseau

総合教育科目ガイドブック

No.16

タイトル“Un roseau(アン ロゾ)”  
—— 一本の葦 —— について

B.Pascal (1623 - 1662) は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。  
葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。  
その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると...。  
しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant.  
(ロム・ネ・カン・ロゾ、ル・プリユ・フェーブル・ドウ・ラ・ナトゥール、メ・セタン・ロゾ・パンサン)

人は一本の葦に過ぎない。自然界でもっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。

人間は水辺の一本の葦のようにはない存在ではあるのだが、  
考える(思考する、思想する)という行為によって有形の現象の世界(形而下の世界)のみならず、  
その奥にある広い広い世界(形而上の世界)を知ることができる存在なのだ。  
Un roseauとは「あなた」のことなのです。

少年老い易く学成り難し  
一寸の光陰軽んずべからず



工学部・工学研究科 鳥生 隆

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。苦労が実つてよかったですね。ご家族もさぞお喜びのことと思います。

**志を見つけよう。**

私は2002年の4月から大阪市立大学の教授を務めています。50才のときでした。それ以前は20年間、川崎に本社がある電気メーカーに勤務していました。大阪には単身赴任です。家族には受験生が一人、高校生が一人、中学生が一人おりましたが、川崎を離れるとき、以下のようなことを書き残してきました。

「父が大学の先生になるのは、学生の皆さんがそれぞれ自分の将来について考え、何を指すのかを探るときの手助けをするためである。」

この気持ちは今も変わりません。皆さんにも4年間の間に自分の将来について考え、何を指すのかを考えて欲しいと思います。別の言葉で言えば、「志」を見つけていくことです。単に何をやりた

強かったように思います。「解放」という言葉が一番びつたりしました。時代は異なり、取り巻く環境も違いますが、おそらく皆さんの心のなかにも、そうした思いがあるのではないのでしょうか。

「解放」されるという感覚はすばらしいものですが、「解放」された途端に次のことを考えざるをえないというのも人生です。人生のなかで、大学時代は短く、卒業後の時間の方が圧倒的に長い。私たちが大学を出て働き始めることを、「社会に出る」としばしば表現します。社会に出て生活を営み、結婚し、子供を育てあげ、老後を迎える、こうした伝統的な価値観から見れば、またそうでなくてもつまり、結婚しないで一人で生きていく場合にも、社会に出て生活を営む期間が人生の多くの時間を占めています。

とりわけ個人の能力を極限まで求められるグローバル化の時代にあつては、どのようにそれぞれの独特の能力を身につけて発揮するかが大事になります。企業、学校、官公庁、家庭と働く場所はいろいろとあり、それぞれの職場で能力を発揮するのが大事ですが、日常の些細な場面でも、オフイスのなかでも、これこそが自分だけがなしうることでと誇りに思えることが生きがいになるでしょう。

誇りさえあれば何とか長い人生を生き抜けると思う。人類社会が創り上げてきた叡智を受け継いできた大学は、社会に出た後の長い人生を生き抜くための準備として、自分だけのものと誇れる何かを発見し、培うのに適した場です。そのために必要なこととして、選択、チャンレ

ンジ精神、異なるものとの対話、この三つを挙げたいと思います。

### 何を選択すれば良いのか？

皆さんはすでに何度も大事な場面で選択してきたわけですが、大学に入ってから選択を迫られます。まず頭を悩ますのは、やはり共通教育、各学部の専門教育でどの科目を選ぶのかということでしょう。

私は数年前、共同研究のためミネソタ大学を訪問しましたが、その際、特に頼んで出席させてもらった講義では、学生はわからないところがあると、すぐに手を挙げて質問し、先生は話が一段落した時を見計らって、まとめて質問に答えていました。学生との対話が重んじられているのが印象的でした。

日本では、講義ものは一方、演習は双方のゼミ方式が一般的ですが、最近では講義も双方の形式にして、対話が大事にされています。一方、授業は、教員の研究内容や最先端の理論などを体系的に学べる利点がありますが、デメリットは学生の積極的な姿勢を十分には引き出せないことです。双方向授業は能動的な学習に適していますが、時間の制約があることから、教員が伝えられる知識に限りがあり、自習が必要になります。先生方がいろいろ工夫を凝らされていますので、シラバスをよく読んでテーマとともに、授業形式にも留意しておくといでしょう。

### チャレンジしよう！

選択するということは、人生の節目で

いかということではなく、自分が生きることの意味を良く考えて欲しいと思います。自分の欲望を満たすというのではなく、自分が世のなかのために何ができるのか、何をすべきなのかということを考えて欲しいと思います。

4年間にこだわることはないかも知れませんが、私は子供たちに30才になるころまでに自分の道を決めれば良いと言ってきました。ゆつくり決めれば良いと言ってきました。大学卒業時に決まっている必要はなく、30才ごろまでに進路変更があつても良いので納得がゆくまで考えれば良いと思います。人間の寿命はほとんど伸びていますし、30年後には平均寿命が100才になるとも言われています。30才から数えても未だ70年あるわけですから、たとえ就職したとしても、自分の将来を探るための努力は続け、一番大事なことは勉強を続けるということ。その努力は決して無駄にはならず、その後の人生が豊かになることで何倍にもなつて戻ってくると思います。

### 私自身はどうだったのか。

私が入学したのは1970年、大阪で万国博覧会が開かれた年でした。前年は学生運動のため東大の入試が中止となりましたが、1年たつてようやく少しは激しさが収まってきたころです。しかし、度々ストライキがあり、十分に授業はできないころでした。それでなくても、あまりじめじめに授業に出たわけではありませんが、毎日欠かさず大学に通い、図書館にはよ

く行きました。大阪市立大学には全国でも有数の立派な図書館（学術情報総合センター）があるので、皆さんも是非利用してください。友達とおして議論できる場も学術情報総合センターにはあります。私自身の話でしたが、キルケーゴールの「死に至る病」など哲学の難しい本も含め、非常に多くの本を読んだことを覚えています。友達と議論できなくなることを恐れていたようにも思います。わけがよくわからないまま、自分が存在するということはどういうことかなど、根源的なことを議論し合つたりしていました。

大学院入試は1年目は失敗し、1年留年した後、素粒子研究室に入ることができました。5年で学位を取りましたが、その後、2年間オーバードクターを経験しました。物理教室の廊下に富士通から求人紙の張り紙があり、思い切つて応募しました。富士通に入社したのは1982年の4月です。すぐに30才を迎えました。こどもたちに30才までに自分の道を見つけてほしいといつたのは私自身のこういう経験もあつたからです。

### 何故勉強するのか。

このように、社会に出たのは30才ですが、それまでに結構勉強したと思います。数学、物理の学力や専門分野の先端知識もさることながら、勉強することによって考える力が養われたと思います。運動することによって体力が増進するように勉強することによって考える力が養われるのだと思います。30才以後さらに体力を向上

みずからの目標を絞っていくということ  
です。目標を絞れば、その目標に向けて  
集中し、チャレンジすることが大事です。  
理想を言えば、卒業後に出る社会を見通  
しながら、学部4年間の計画と目標を立て  
能動的に学習を進めることですが、おそ  
らく言うほどたやすくはないでしょう。  
共通教育、専門教育でそれぞれに合った  
科目を選択し、卒業に必要な単位を充足  
するプランを立てても、挫折もあれば寄  
り道もあります。

私は集中力やチャレンジ精神を培うつ  
えでそれぞれの動機付けが必要だと考え  
ています。たとえば、幕末、身分制の下  
層に生きた若者にとって、はるばる新大  
陸から渡ってきた黒船は身分の桎梏から  
解き放ち、未来を切り拓いてくれる象徴  
として受け止められたことでしょう。海  
外からの刺激が当時の若者の能動的な生  
き方を引き出してくれたわけです。

戦後の日本社会は、国内の高度成長、  
グローバル化の潮流のなかで、戦前以来  
の旧社会を資本主義により適した構造に  
転換し、それまでに培った技術力や新た  
な社会の仕組みをベースとして、積極的  
に世界に乗り出しました。この激動の時  
代のそれぞれの局面において、若者は、  
学生は、自分に合った生き方を選び取り、  
時代をバネとして生き抜いてきました。  
人生を生き抜く力を与えるチャンスや動  
機はそつした社会のあちこちにあったと  
思います。

市大に入学した皆さんにとって、時代  
が付与するチャンスはどのようなもので  
しょうか。グローバル化と反グローバル化

欧米とアジアの激しいせめぎ合いのなかで、  
よくよく目をこらせば、身の回りにチャ  
ンスはひしめいています。大事なものは、  
そのチャンスをつまぐ捉えて、何事にも  
チャレンジしていくことです。

### 異なる者との対話

最後に、皆さんが学生生活を送るに際  
して、ぜひ希望したいことがあります。  
それは、「異なる者」との対話です。入学  
してから皆さんが出会う人の多くは、郷  
里も学校も生活環境、性格も異なります。  
異なる者との対話することは、自身の精神  
に刺激を与え何かを自覚めさせ、新たな  
方向性を導き出す可能性があるという点で、  
それぞれの人格を成長させるものだと思  
います。

さらに、日本の経済を牽引する企業が  
アジア、欧米に活動を展開し、政府や地方  
自治体の眼も海外に向いている現在、世界  
の多様で異なる民族・宗教などを人生の  
視野に収めることが必要になっています。  
留学や語学研修などいろいろな機会を利  
用して、海外で生活し、異なる言語をも  
つて対話することを皆さんに推奨します。  
「異なる者」との対話は、頭脳を活性化  
させる有効な手立てです。

### 井上 徹(いのうえとおる)

1954年生まれ  
1986年名古屋大学大学院文学研究科単位取  
得退学、博士(歴史学) 現在、副学長  
専攻分野/東洋史学  
全学共通教育の担当科目/「大阪学 グローバ  
ル視野から見る大阪」;「東洋史の見方」;「東洋  
社会の歴史」

させることが簡単でないように、考える  
力も30才までに鍛えておいたほうがよい  
と思います。運動することによって筋肉  
が付くように、勉強することによって頭  
脳が現実に発達すると思います。そうす  
るかどうかによって、その後の人生は大  
きく変わってくるのではないでしょう  
か。

考える力だけではありません。人は勉  
強することによって人格が磨かれます。  
勉強することによって、あるいは本を読  
むことによって多くの先人の考え方や感  
じ方にふれることができ、その経験を重  
ねることによって成長します。知識を得  
ることもさることながら、人間として成  
長することのほうがその後の人生を豊か  
にしていくためにより重要だと思います。  
そのためには、専門科目の勉強だけでなく、  
全学共通教育科目の勉強にも努めること  
が必要です。

もうひとつ重要なことがあります。勉  
強は自分を磨きあげるためにするのだと  
いうことを述べました。では何故自分を  
磨きあげるのか。その後の人生を豊かに  
するためということでしたが、ここで忘  
れてはいけないことがあります。それは人々  
の役に立つために自分を磨くという視点  
です。人にはそれぞれ持って生まれた役  
目というものがある。それを成し遂げる  
ことによって人々の役に立つ。そのため  
に勉強するのです。人々の役に立ち、認  
められたら、これほどの幸せはないと思  
います。自分がしたことで人々の笑顔を  
みることができたら、それほどうれしい  
ことはないと思います。人生を豊かにす

るといふことは「いいこと」なのです。「志」とはそういうものだと思います。  
もちろん勉強だけが大学生活ではあり  
ません。サークル活動や友人との付き合い、  
旅行その他、十分に時間を活用して  
多くの経験をし、幅の広い視野を持つこ  
とも重要だと思います。

### 最後に

私がこの大学にきてから13年になります。  
長男と次男は自活し、末娘はヨーロッパ  
で留学中です。それぞれ自分に適した道  
を見つけてほしいと思います。大学に入  
学されたみなさんも、大学で勉強できる  
ということは非常に恵まれたことな  
りから、このチャンスをつまぐに活かし  
てほしいと思います。自分を精いっぱい  
磨き、「志」を見つけ、それぞれ自分が活  
躍できる場所を築いて欲しいと思います。  
30才まで、ゆつくり時間をかけて良いと  
思います。しかし、時間を無駄にしてし  
まっては後で取り返すのはもう難しいと  
思います。少年老い易く学成り難し。一  
寸の光陰軽んずべからず。

### 鳥生 隆(とりうたかし)

1951年生まれ  
1980年 京都大学大学院理学研究科博士  
課程物理学第二専攻修了、理学博士  
現在、工学研究科電子情報系専攻 教授  
専攻分野/コンピュータビジョン  
全学共通教育の担当科目(以前担当した科目を  
含む)/「技術と生命」の一部